

## 第7回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

### 選考結果

第7回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第120号、121号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、井上環会員の「デューイ自然主義における質感—サブジェクト—意味の動態—メディウムとしての更新者—」（『教育哲学研究』第121号所収）を受賞作として選定した。

### 授賞理由

井上論文は、ジョン・デューイ哲学における「質感（quality）」と「意味（meaning）」を鍵概念として、彼の経験論的自然主義における経験と言語の関係把握を究明することを目的としている。本論文はまず、デューイにおける質的で直接的な「経験」という想定が認識論的な文脈において無批判な基礎付けの役割を果たしてしまうというローティの批判に言及した後、デューイの経験概念が歴史性や時間性を帯びているがゆえに経験と言語の明確な二分法をとるわけではないことを指摘する。そして著者は、「意味」概念の検討を通して、デューイ自然主義においては経験と言語が相互に作用を及ぼしあう関係にあるものとして把握されていたことを解明している。以上のような検討を足場として、最後にデューイにおけるサブジェクト概念が「既存の意味秩序を組み替える創始・刷新者としてのあり方」を示すものであることを明らかにし、「自然的な出来事の歴史的帰結として非人称的に到来する声としての質感に導かれながら、新たに意味を象り直しその声を社会的次元へと還元するメディウム」として捉えうることを強調している。

著者は、デューイ哲学の新たな解釈の可能性を現代の（教育）哲学における中心的なテーマ（言語と経験の関係の問題）と関連づけて説得的に示している。デューイにおける言語と経験の関係の捉え直しから主体概念の更新に至る論の構成も堅実である。結論部においては、「メディウム」としてのサブジェクトに関する新たな語り方を獲得しており、その点で「主体」論およびそれと密接にかかわる人間形成論に興味深い問題視角と知見をもたらす好論文として評価された。その一方で、デューイを歴史的な文脈において捉える作業は十分になされているとはいいがたく、彼の哲学をその可能性と限界の双方において批判的に吟味することは今後の課題として残されている。また、メディウムの訳語として用いられている「霊媒」など、論考においてさらに説明が必要と考えられる部分が含まれている。それらについては今後さらに積み重ねられていく著者の研究活動によって回答が示されることを期待したい。本論文は、先行諸研究を的確に踏まえた教育哲学的な問いの設定を行い、デューイの原典を精緻に読み解き、独自の着眼点と論理展開によって明快かつ重要な結論に至っており、奨励賞の水準に十分に達していると評価された。

以上をもって、理事会では井上環会員の「デューイ自然主義における質感—サブジェクト—意味の動態—メディウムとしての更新者—」を第7回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。